

障害者との交流活動における音楽の役割(I)

— 障害者と音楽との関わり —

The Role of Music in Exchange Activities with Disabled People(I)

— The Relationship between Disabled People and Music. —

藤 原 等 塩 田 英 樹

Hitoshi FUJIWARA Hideki SHIOTA

I はじめに

現代は、情報や交通の発達と共に、世界的な規模でのコミュニケーションが国家間のみならず、企業、学校、一般家庭にいたるまで盛んに行われている。カナダの文明評論家 M.マクルーハンが国際社会でのこのような新しい姿を、現代の世界が“地球的村落”になったと描写しているが、国内においては、バリアフリーが叫ばれつつも障害者と健常者の世界には、施設・設備の面のみならず、人間の心の内面においても依然として隔たりがあるような気がしてならない。近年、この両者のコミュニケーションを図る様々な取り組みが行われているが、本論ではこの両者を結びつける音楽の役割に着目した。我々健常者のみならず、障害者にとっても音楽は日常のあらゆる面で関わりをもち、身心両面に影響を及ぼしている。そこで、このコミュニケーションの媒体としての音楽の重要性を再確認すべく、本稿では「障害者と音楽との関わり」を明らかにすることを試みることにした。

II 障害者と音楽の関わり

国際交流の催しや初めて会うグループ同士の交流の際によく音楽が使われる。それは、音楽には人間としての共通の要素があるからだろう。ピアーズは次のように述べている。「我々は心臓の鼓動、呼吸、歩行などリズム的要素を持ち生きています。また我々はトーンによって表現します。音楽の中にも我々の中にもこの様な生まれ持った性質があるのです。」¹

彼が述べているように、音楽のもつ基礎的な要素であるリズムやトーンが我々の中にも存在するからこそ、音楽には違った世代、民族、宗教、生活などを超えて様々な文化を結びつける力をもっている、ということがいえる。つまり、たとえ異文化の音楽であったとしても自分たちと同じ共通性を見出したり、似たような音楽であっても違いがあるからこそ興味をもったりして、今までにはなかったコミュニケーションが成り立つ可能性が音楽には秘められている、といっても過言ではない。

これらのことは障害者の交流の際にも有効である。A.オールドフィールドが「音楽は知的過程を通らずに直接情動に働きかける」「音楽は発散的である」²と述べるように、不幸にも障害を

負ったため周りとのつながりが希薄になり、自己を抑圧していた障害者の心や身体を音楽は解放する可能性を秘めている。このように、影響力のある音楽が「障害者にとってどのような役割を果たし、関わっているのか」を明らかにすることによって、健常者との間にある差異を乗り越え、逆にその違いから新たな視点を見出すことができるかもしれない。そこで今回は、障害の違いによる「障害者と音楽との関わり」の特徴をまとめることにした。

1. 視覚障害者

(1) 音に対する繊細な感覚

視覚的に障害を抱える人にとって、音は生きる上で欠かせない情報源である。盲目のオルガン奏者大島彰が「私たち目の不自由な者にとって音は情報源であり生命線なのである。それだけに音に対する感性は健常者より鋭くなる」³と述べているように、視覚障害者は音によって方向感覚や遠近感をつかみ、危険を察知して生活している。このように常に音から得られる情報に注意を払わなければならないため、視覚障害者の音に対する感受性は健常者に比べて非常に発達していることだろう。例えば大島は、小さかった頃に姉のアサガオの観察につきあう場面で、アサガオの花がはじける音に気づき、健常者である姉がその発見に驚いたことを記述している⁴。盲目のジャズ奏者スティービー・ワンダーも「目が見えなくても幸せ。(略)目が見えない人は、他の感覚がすぐれている」⁵と、鳥の声や風のささやきなど微妙な音をも感じ取り、音が彼の喜びとなっていることを述べている。

よく「人の心が声に表れる」などと言われる。われわれは電話をするときなど“顔の表情”や“しぐさ”などの視覚的な情報に頼れないときに、“声”などの微妙な音の変化からその人の心の動きを察知しているときがある。盲者の箏の作曲家宮城道雄は教え子のお稽古の時間に、演奏を聴いて「何か悩みがあるのか」と教え子の精神状態の乱れを指摘した⁶。このように視覚障害をもつ者は、健常者が時には気がつきにくい細かい音の変化を感じることができる繊細な感覚をもっている、ということがいえる。

(2) 音に対する記憶量の多さ

普段、我々は音楽を演奏するときなど、楽譜に書かれた音符のデータを読み取ることで音を再現しているが、そのため「楽譜がなければ音楽の演奏ができない」という人も多い。しかし、「楽譜という記録媒体がなければ音楽は再現できない」ということはない。文字をもたないアイヌ民族では、“ユーカラ”という歌の物語が古くから語り継がれてきたが、これも文字で表されていないが故に、口承という形で人々の頭の中にしっかりと記録されたからこそ受け継がれてきた、ということがいえるだろう。

視覚により書かれたデータを確かめることができない視覚障害者は、点字楽譜などの媒体を用いない限り記憶を頼りにことを進めるほかない。そのため、暗譜をする必然性から、彼らには音楽的な記憶能力が発達する、ということが推測できる。盲目のピアノ奏者レスリー・レムキは脳性小児マヒによる後遺症で知能指数は3、4歳の幼児程度だと言われているが、巨大な音

樂的記憶量をもち演奏会では全曲が暗譜での演奏である⁷。また、オルガン奏者の大島彰も小さい頃から楽譜に頼らず、頭で音楽を記憶する能力が発達したことで、譜面なしでの「100時間連続演奏」という快挙を成し遂げることとなった⁸。見えないということから「音を脳裏に記憶しなければならない」という必要性が、逆に楽譜に頼って演奏をしている者よりも「音を自分のものにし、音に集中することができる」ということがいえるだろう。

2. 聴覚障害者

(1) 音の振動を感じる

聴覚障害者は、声を使った会話の代わりに手話や読唇を使ってコミュニケーションをとることが多い。そのためか「聴覚障害者は音を介したコミュニケーションが成立しない、または、しにくい」という認識をされることが多い。ベース奏者のG.カールは、聴覚障害の研修をしていた医者より“耳の聞こえない子どもたちへの演奏”の依頼を受け、最初は「変な依頼だ」と首を傾げていたが、実際に演奏をしてその子どもたちの表情などから音楽に反応していることを知り衝撃を受けている⁹。このように一般的には「聴覚障害者が音楽に親しむ」ということについて、疑問をもっている人も少なくはないだろう。

しかし、B.リーマーが「直接の音自体は、“聴かれる”よりは“感じられる”ものであるから、われわれは密着した事象を、知覚力ある耳で聴くというより、“肌で感じるように”聴くのである」¹⁰と述べているように、聴覚障害者が音楽を体感するというのは頷けることである。そもそも、健聴者は空気が振動した周波数のうち耳に聞こえるものを音として認識しているだけのことであるから、ヘレン・ケラーが幼いときに「ピアノの上に手を置いて演奏を聴く(感じる)のが好きだった」¹¹というエピソードや、聴覚障害者が「太鼓の演奏の響きを鑑賞して楽しむ」といったような、音の振動を感じることは健常者ではなくとも起こり得ることである。実際、音楽的な信号のエネルギーは言語の場合よりも何倍も大きく聴覚器官や神経等が反応しやすいため、言語には反応しない打楽器奏者のエヴェリン・グレニーも長年の間に音楽的信号に敏感になり、(あごの骨など)身体の一部で音楽を感じて演奏することができるようになった、ということである¹²。普段は可聴できないような周波数の音であっても増幅されることによって我々も感じるようになるように、ある特定の周波数を捉えることが難しい聴覚障害者もそれを補助する手段があれば聞き取ることは可能になってくるだろう。ニューヨーク州立聴覚障害児学校のA.ブースロイドは、「高い周波数の楽器(トライアングル)などの例外を除けば、聴覚障害者も適切な補聴器をつけることによってほとんどの楽器の倍音が可聴となる」¹³と述べているが、彼によれば、聴覚障害者の90%以上の子どもたちはデータ上聞こえており、5~10%の全く耳の聞こえない子どもたちも音を聞くのではなく振動を感じて音を認識している、ということである。オルフも「(聴覚障害の)彼は耳だけで聞いているのではない。太鼓の表面の共鳴、足踏みやスキップによって引き起こされる床の振動が、それまで彼には閉ざされていたものを理解させてくれるのである。」¹⁴と、もともと空気の振動を耳で聞くことはできなくとも、

聴覚障害者は足や皮膚などから微かに感じることでその振動を捉えることができる、ということ述べている。そして、わずかな聴覚経験があった者については「これが聞こえたんだから他の楽器だってきっと聞こえるよ」と述べることで、一つの楽器で経験された聴覚刺激が「他の楽器ではどうであろう」という興味を呼び、外界に向かう態度ががらりと変わる、ということである¹⁵。わずかな聴覚の刺激を捉えることができた喜びは他の音を探ろうとする動機付けとなっていくだろう。

(2) リズム感覚をとらえる

健常児が多くの音楽的な音に触れながら成長し様々な音楽の知識を得るのに対し、聴覚障害児はそうした音楽的経験がほとんどなく、本来もっている音楽的感覚が埋もれてしまっている可能性がある。ダルクローズの音楽教育を取り入れたトモエ学園の創立者小林宗作は音楽的感覚について、「音楽的感覚はリズム的なものであって、単に聴覚のみに依るものではなく、全身の筋肉的、神経的作用に依って左右されるものであろう」¹⁶と、音楽リズムを運動に反応させるリトミックを音楽的感覚が発達途上にある幼児の音楽教育で用いている。こういったように音楽の感覚を身体で感じさせる方法は聴覚障害者にとっては有効であるに違いない。実際、わらべ唄ふうの身ぶり手ぶりをまじえたジャンケン遊びの場面などでも、聴覚障害をもつ子が最初半テンポくらい遅れていたのがくり返し遊んでいるうちに覚えて呼吸がぴったりあうようになっていく、という事例がある¹⁷。オルフは「手拍子する手、揺らすからだ、歩き踏みならず足によって達成されるリズムの統一が、子どもの中に浸透し、それらの振動が彼の内部で複製される」¹⁸と述べているが、友だちとのやり取りの中で、間の取り方を覚えることによって確認しにくいリズムが次第に身についていくのだろう。音楽療法士C.ロビンズは「聴覚障害児と健常児のリズムを感じ取る能力に全く違いはありません」¹⁹と述べているが、このようにリズム感覚を鍛えていくことで、視覚を利用して相手の動きに自分のリズムを合わせ、音楽を楽しむ余裕ができることだろう。

(3) 音を他の感覚でイメージする

聴覚障害者に対して聞こえない音の指導をすることは困難が予想される。しかし、ある教師は次のように“息づかい”をもって捉えさせることにより、たて笛の音の出し方を覚えさせている。

「私は、『そっと息を吹き込むんだよ』と、Mさんの掌にフーッと息を吹きかけてやった。『こんなにそっとだよ』と。Mさんは、大きく口をあけ、首を振った。ああそうかという表情で、すぐにたて笛を持ち出してきた。そんなささやかなきっかけで、ぐんぐんとたて笛はうまく吹けるようになった。』²⁰

この児童(Mさん)は、当初耳で自分の演奏するリコーダーの音が聞こえないため乱暴な音を出していたが、このように息の出し方をイメージさせることでリコーダーの演奏がかなりうまくなってきたという。このように、聴覚障害者にとっては、必要不可欠な情報源である「聴覚以外の感覚で音楽を捉えさせる」ことは大事なことである。オルフは音楽療法の面で、さま

ざまな音の高さの違いを視覚的印象によって明瞭に示す長さの違う音板の活用が効果的であるとのことから、ウッドブロックや音版楽器（木琴やメタロフォンなど）を治療で視覚的に使用することを述べている²¹。音の高さだけではなく、リズムやハーモニーなども他の感覚で補完することはできるだろう。音に「大小」「長短」「明暗」「硬柔」「調和・不調和」があるように、実際美術や舞台芸術など様々な場面で視覚的にそれらが表現され活用される場面が数多く見られる。健聴者と聴覚障害者が共に音楽を楽しむ活動をする団体『メディア・ワークス』の代表である佐藤慶子は、水面に滴が落ちたときにできる波紋を音楽にした『ウォーターミュージック』を作曲している。この曲はその波紋の映像と音楽が融合された作品であるが、作曲者の佐藤は「私の目指す音楽は従来のドレミファソラシドにとらわれず、もっと音楽の枠組を広げて体で感じたり、映像やサインソング、総合的な分野にまたがる活動をしていきたい」²²と述べており、聴覚障害者も音がイメージしやすいように五感をつかった音楽の作曲を目指している。ライブコンサートや演劇の舞台などで音楽と共に照明が使われ演奏者が派手なパフォーマンスをするのも、この「聴覚以外が与える効果」を狙ったものであろう。五感をうまく活用することが聴覚障害者との音楽の中では不可欠になってくるだろう。

3. 肢体不自由者

(1) 心身をリラックスさせる

肢体不自由の人にとって大変なことは「行動の範囲が制限されている」ことだろう。例えば、スポーツは移動することで競技者同士のコミュニケーションが成り立っているが、自由な移動ができない肢体不自由者にとっては健常者との対等なコミュニケーションは制限せざるをえない現実がある。一緒に行動がとれない状況では、運動不足から更なる身体の機能低下を生み、精神も頑なになってしまうだろう。ミッチェルは、これら移動の面などで障害をもっている者に対して音楽療法でできることの最大の機能として「音楽によって刺激を与えたり、伴奏したりして身体の動作を促すこと」²³を挙げている。ミッチェルによれば、「音楽療法士が適切に選んだBGMは、子どもたちの四肢をリラックスさせ、協応を助ける」というように、優れた音楽療法士は子どもが移動などをどの程度までできるかを見きわめながら、そのレベルに合わせてリズムやテンポを決め、子どもに適した練習をしている²⁴。

往々にして機能回復のための訓練は単調なものとなりがちだが、音楽の使用はそのつまらない訓練の退屈さを緩和する役目をする働きをもつ。「脳性小児マヒ」の子どもたちへのバランス訓練では、リズムの支持によって片ひざ立ちや階段の昇降訓練は目的をもち、リズムのフレーズから自然に反復が生じ、それによって子どもはこれらの訓練を強制されたものと感じることはない、という²⁵。そのことから、「リズムや音の支持でつくられる遊びの雰囲気は、治療効果を妨げるどころかむしろ治療を有効にする」と、オルフは述べている。

また、音楽は自由に身体を動かすことが難しい肢体不自由者に精神的なイメージを浮かび上がらせ、実際には体験できないことにもイメージをさせて楽しませることができ。例えば、

ジュリエット・アルピンは次のように述べている。

「私はスペインの音楽を演奏しているときに、足のわるい子どもたちが、実際には動いていないのに、スペインの衣装をまとい自分たちが踊っている感じを想像して楽しんでいるのを見たことがある。(中略)彼らは、また音楽の中で描きだされている人物、たとえば、音楽の中で生き動いている羊飼いの少年とか、踊っている人形とか、年老いた乞食などとも同一化する。この同一化の過程は、情緒障害をもつ子どもには、とくに貴重なものと思われる。」²⁶

音楽は、それを聴く者がまるで他の場所へ移動したかのような印象を与えることがある。私は以前、中国の伝統的な楽器を用いた管弦楽団の公演をアメリカの劇場で聴いたことがあるが、その時受けた印象がまるで自分が中国に来ているかのような錯覚をしたほど大きかったことを覚えている。姜信子が「ときには、たったひとつの歌が、その音とリズムで一瞬にして見慣れた空間を別の世界へとつくりかえ、心臓の鼓動のリズムを変えてしまうことさえあります。」²⁷と述べているように、音楽の力を利用して想像力を沸き立たせることで、単調な運動にイメージをもたせ、楽しいものに意識づけをすることができるだろう。

(2) 身体の機能を高める

養護老人ホームの施設長浦野正永は、「お年寄りが転んで骨折が多い」ことに疑問をもち、その生活を観察した結果「お年寄りは歩くことがスムーズでない」ことに気がついた。しかし、器楽クラブの中でリズムを取り入れてから、お年寄りたちの生活自体にテンポが生まれ、転ぶ人が少なくなったことを一番感じていることとして述べている²⁸。国立箱根病院の神経内科医師村上慶郎は、音楽を肉体の治療に使う場合に考えられることとして三つの点を挙げているが(①『音楽のリズム』、②『呼吸機能の改善』、③『手足の筋肉の強化、筋肉のバランスの回復』)²⁹、①の『音楽のリズム』の訓練によって歩行などに代表される「リズムを伴う活動の向上」を図ることができるだろう。それに加え、肢体不自由者への影響として着目したいのは③『筋肉強化、バランス回復』としての役割である。赤星建彦は、筋ジストロフィー病棟の演奏会を参観して手の動かなかった子どもたちが喜々としてギターを楽しんでいる様子を述べているが、この病棟の医師は「子どもたちがギターをやるようになってから筋肉の機能の低下のスピードが遅くなった」³⁰と述べている。また、足立区心身障害福祉センターでは音楽サークルを結成しいろいろな活動を行っているが、参加者からは「鈴をふることを通して、手の動きがスムーズになったような気がする」³¹という声が出ている。ある老人養護施設の婦人は脳卒中が原因で右腕と手の機能が働かなかったが、音楽のリズムに合わせて柔らかいゴムボールを何回となく握り締める運動を続けるうちに、次第に短時間にその動作ができるようになり、オルガンの演奏を学び始めるほど手や腕を使うことができるようになっていった。その上、彼女はオルガンの腕前を自分の子どもたちや孫たちに披露したいため、これまでよりもたびたび子どもたちの家を訪問するようになり、他の仲間たちとの相互交渉の機会をも増やしていった、という事例がある³²。このように、音楽の活動によって機能が回復するにつれて自分に対する自信が生まれ、新たなコミュニケーションが広がる可能性がある。

ここで身体機能を高める運動を行うときに留意すべき点を述べてみると、個々の障害はそれぞれ異なるため、その人の病状では「どんな動きができるのか」、また「必要か」の判断を見きわめることが大切である。赤星は音楽療法を実施するときに、ミニオルガンは“指先を刺激した方がよい人”に、鉄琴は“腕の動作を必要とする人”にするなど、その障害に応じて使用する楽器を振り分けているが、彼は「それぞれの障害に応じた楽器の選定が重要である」と述べている³³。しかしながら、片方に障害がある場合は障害のある側が十分に発達せず、特に子どもであれば常に健常の側で活動するのを好む傾向があり、他の側を使わせようとするとないて意識して抵抗をする、とオルフは述べている³⁴。このことから、健常の側ばかりが発達し障害のある側は衰えていく傾向があるわけだが、オルフが「本人が両手の使用が真に必要と思えば、きっと連動させた動きを練習するに違いない」³⁵と述べていることから、音楽活動の中の必然的な動きの中から、衰えがちな側の機能の向上を図ることはできるだろう。例えば、ボンゴや木琴、小太鼓などの左右の手を使う楽器は上肢の運動を助けるものとして挙げる事ができる。

4. 知的障害者

(1) 言葉を介しないコミュニケーション

言葉をもたない人間以外の動物（イルカなど）でも“鳴き声”や“身体の動き”などの「非言語コミュニケーション」を活用して他の生き物たちとの関係性を保っている。人間も動物から進化する過程で言葉を介しない“非言語（ノンバーバル）コミュニケーション”が存在したことで周囲とコミュニケーションをとってきたことだろう。ネトルは、「最古の時代の自然民族の文化において、会話でも音楽でもなかった“未分化”のコミュニケーションが存在した」³⁶と述べているが、知的障害者においても声の中に音楽のような自由な表現が見出されるときがある。オストワルドは赤ん坊の泣き声を分析し、「その“大きさ、長さ、高さ”は“痛み、空腹、悲しみ”などの要因に影響され、どの国の子供もきわめて類似している」³⁷と述べているが、このことから声という“音”で感情を表現しようとする本能が人間には生来備わっているといってもよいだろう。その自在な“音”を利用してできた言葉を活用する能力はコミュニケーションを図る上で人間が作り出した高度な知的能力の一つともいえる。現代社会ではこの“言語活用能力”がコミュニケーション能力として問われる場面が多いのだが、知的障害者にはそのverbal上の理解を判断するだけでは稚拙な表現になったりし、コミュニケーションを図ることに対して劣等感に陥ってしまうかもしれない。実際、知的障害者の表現に対して健常者が蔑んで見ることが現実としてしばしば見受けられる。文明の発展と共に、コミュニケーション技術は距離や時間の感覚を狭め高まってきたように思われるが、千住真理子が「言葉という小道具を身につけてしまった人間は、現代において“思いを伝達する”ということが下手になってしまった」³⁸と述べているように、言葉が発達したことによって「言葉で全てを伝えることができる」との思いから、現代人が言葉に表れないものを受け取る感性や能力が衰えてしまった可能性は大きい。しかし、この言葉では伝わりにくい気持ちや感情も、声やその他身体から表現さ

れた音によって相手のことを理解することでコミュニケーションが成り立つ場合がある。普段我々は言葉の表面上には表れない感情の起伏のようなものを「相手の発する声」や、「動きから出る音」から洞察をしている。このことは人間に限らず言葉の使えない動物においても見られることである。L.バントが「音や音楽の要素に対する反応はきわめて基本的なものであり、必ずしも複雑な知的作用を通して理解されるものではない。」³⁹と述べているように、音をつかったコミュニケーションは、この複雑な言語環境の中であって、知的障害者がコミュニケーションを図る手段として有効であるということがいえるだろう。

音楽が知的障害をもつ者にとってコミュニケーションづくりに役立てられることの理由の一つとして、「音楽で表現されるものや事柄が具象化してあらわされない」ということが挙げられる。通常、コミュニケーションを図る場合、メッセージの送り手は考えや感情を言語などの記号体系に記号化するのだが、言語の場合については「内容の正確さ」が伝達する際の価値基準として重要な事柄となる。つまり、伝達するものとされるものとの間の捉え方（内容）に違いが生じればコミュニケーションは成立しない。しかし、伊納美智子が「(音楽は) 具体性を帯びたものがなにもないだけに、音楽を聴く人間の想像力や創造力をいくらかでも羽ばたかせることができる」⁴⁰と述べるように、表現される音楽は、それを聴く者が一定の型にはまらず自由に捉えることができる、という点で言語を介したコミュニケーションではついていけない知的障害者にも享受することができ、他者とのコミュニケーションを生み出す可能性を秘めている、といえる。

(2) 心を解放する音楽

音楽を使った療法はよく精神遅滞の子どもにも応用されている。ある重度精神遅滞男児（7歳）の例では、週1回の遊戯療法を含む音楽セラピーに通った結果が次のようにある。

「彼は、週1回の音楽セラピーに4回通った結果、外見上はまったくわれわれのセッションに参加していない様子に見えたが、他の子どもたちや遊戯集団が行っていることには興味をもつようになった。(中略)以前は触れることによる人間関係がなかったが、今では緊張も解けて保母に寄りかかっていた。この接触が確立するにつれて、彼の人や物とのかかわりが始まり、それはいっそう促進されていった。」⁴¹

これは言語を超えた音の世界でのかかわりによって、この男児の心が解放され他との交流を深めていった例といえる。子どもの世界ではわらべ唄に代表されるように遊びと音楽は密接な関係があり、教育現場でも仲間づくりや授業の雰囲気づくりなどでこのように音楽を通した“歌あそび”のようなものがよく行われている。巡静一が「さまざまな要因によって言語的諸機能にハンディキャップを有し、外界とのかかわりがそこなわれ言語能力が十分に作用しにくい条件にある障害児にあっては、自己を最も自然に外界へ表出することができる“遊び”は、外界との重要なコミュニケーションの機会となります。」⁴²と述べているように、“歌遊び”などに代表される「音楽によって心を解放すること」は、孤独に陥りがちな知的障害者にとってもコミュニケーションづくりを進めていく上で重要なことである。

言語遅滞を伴っている者に対しても、「音楽が心を解放する」ということは治療に役立っている。ミシガン州立大学では言語遅滞を伴う男児数名に対して、通常行われている言語治療（スピーチクリニック）の「統制群」と歌唱を中心とする音楽活動の「実験群」とに分かれて治療セッションを行った結果、両者の間には有意な差が見られ、「実験群」の方が自発的に話をする行動が多く観察されている⁴³。L.バントも「子どもを対象とする多くの音楽療法の、くつろいだ、そして子ども中心の雰囲気は、子どもたちがあそびのように楽しみながらさまざまな発声を試みる意欲を育てる。」⁴⁴と、音楽的な相互作用を通して発声活動を促進し、刺激することが重要であることを述べている。普段、我々も緊張をしていたり自信がなかったりするとうまく話すことができなく、反対に元気潑刺としていると言葉がとめどもなく溢れ出すように、言葉の発声は心の動きに左右されているところが大きい。知的な障害を抱え一般的な能力で自信を失う恐れのある障害者にとって、このように音楽によってリラックスしながら言語や行動の治療に役立てることは有意義であるといえる。

(3) 行動を改善する

知的障害者に対して音楽を通じた療法を試行した結果、行動に変化が現れている事例は数多くある。足立区心身障害福祉センター（東京）の音楽サークルでは、文化祭や区民フェスティバルなどに参加して区民との交流を行っているが、その結果、参加者から「言葉がはっきり言えるようになり、声も大きく出せるようになった」「音楽の練習を通して、いつの間にか集中力や持続力に自信がついた」等の感想が出され、日ごろの練習の成果を大勢の人の前で発表できることが活動範囲が狭くなりがちな障害者に活気と自信を与えている⁴⁵。

また、多動児に対する訓練プログラムの例として、数種類のクリニックで療法を受けながら奇異な行動（走りまわる、回転するものに心を奪われる）が一向に改善されなかった8歳の男児に対して音楽を通じた療法を施行した結果、治療を強化する時期においては96%の成功率で治療者のそばから逃げることなくまっすぐに歩き続け、その後、車に乗ったときに暴れまわる行動が修正されるようになったという⁴⁶。これは、音楽療法によって行動に落ち着きをもたらされたということであるが、実際、兵庫県出石町の県立養護学校での訪問演奏の中で「会場の体育館には、5分と居続けられない子が1時間以上も演奏を聞いていたり、知的障害で楽器を持つと固まってしまう子が、みんなと練習するうちに堂々と演奏できるようになる」⁴⁷という事例をBORO（森本尚幸）は述べている。

音楽療法などでは打楽器などを使用しリズム打ちがよくされているが、オルフが「手拍子、歩行、太鼓によって長いフレーズを続けることは、自己から他の対象への注意の転換をもたらす」⁴⁸と述べているように、療法を受けるものは「拍の感覚を合わせる」という基本的な動作によってリズムを作り出している他者を意識することができる。一方、明確なメロディの形をとったり特定のリズムの形を用いたりしない音楽についてはどうであろうか。オルフは非言語的に行われるそのような音楽療法の形について、「子どもも待ったり相手に合わせることを要求されずに参加できるし、経験が増すにつれて忍耐力や集中力が養われる」⁴⁹から特に重要であるこ

とを述べているが、そのことが「不活発になりがちな子どもたちには活動性と参加への意欲を促進し、また特に多動の子どもにも有益である」という。

これらの事例からも、音楽の活動を通して知的障害者の行動に変化（忍耐力や集中力がつくなど）を促す力が音楽には存在するといつてよいだろう。そして、適切な行動の変化によって社会参加への自信が深められ、周囲とのコミュニケーションを積極的に図ろうとする態度が芽生えてくるのではないだろうか。

III おわりに

本稿では、「音楽は障害者と密接な関わりがある」ということについて述べてきたが、取りも直さずそれは音楽文化が浸透してきている現代において「音楽が健常者と障害者をつなぐ媒体としての可能性をもっている」ということにつながるだろう。知的障害者の音楽グループ『サルサ・ガムテープ』の支援を頼まれた若者は、最初障害者達に対して「俺たちとは違う世界の人達だ」と思っていたのが、彼らの音楽活動を支援する取り組みを通して次第に彼らに親近感をもつようになっていった⁵⁰。健常者と障害者の交流は、スポーツ、絵画や彫刻などの芸術、料理などあらゆる方面での取り組みが行われているが、その中でも「音楽が両者の交流に果たしている役割」とはいったいどういうものだろうか。今回の「障害者と音楽との関わり」をもとに、次稿では「音楽が交流活動に果たしているプラス面（利点）」、また「交流を進めていく際に注意すべき点（留意点）」についてまとめていきたい。

IV 文献

- 1 イギリス BBC 制作『ビデオ；転換期の障害児教育④音楽療法』、三友社出版、1999、(MUSIC CHILD-Music and The Deaf,BBC,Eng,1983)
- 2 レスリー・パント著、稲田雅美訳『音楽療法—言葉を越えた対話—』、ミネルヴァ書房、1997、490 P
- 3 大島彰著『心の月は沈まない』、河出書房新社、1995、71 P
- 4 前掲書 (3)、80 P
- 5 『New Horizon 2』、東京書籍、1999、87—89 P
- 6 『知ってるつもり—宮城道雄』日本テレビ、1994年度放送
- 7 『奇跡のピアニスト、レスリー・レムキ』1987.5.8~6.8全国縦断コンサートプログラムから
- 8 前掲書 (3)、71 P
- 9 イギリス BBC 制作『ビデオ；転換期の障害児教育②聴覚障害者と音楽』三友社出版、1999、(MUSIC CHILD-Music as Therapy,BBC,Eng,1983)
- 10 ベネット・リーマー著（丸山忠璋訳）『音楽教育の哲学』、音楽の友社、1987、166 P
- 11 津田道夫編著『統合教育』、三一書房、1984、75 P
- 12 エヴェリン・グレニー著（岩瀬孝雄訳）『リズムは心に響く』、サイマル出版会、1992、143 P

- 13 前掲 (9)
- 14 ゲルトルート・オルフ著 (丸山忠璋訳) 『オルフ＝ムジークセラピー』, 明治図書, 1992, 82 P
- 15 前掲書 (14), 82 P
- 16 野村健二著 『トモエ学園の仲間たち』, 三修社, 1983, 215 P
- 17 前掲書 (11), 132 P
- 18 前掲書 (14), 81 P
- 19 前掲 (9)
- 20 前掲書 (11), 130 P
- 21 前掲書 (14), 27 P
- 22 NHK教育 『みんなの手話』 第4回, 1998年度放送
- 23 D.E.ミッチェル著 (清野美佐緒訳) 『障害児教育のための音楽療法入門』, 音楽の友社, 1998, 49 P
- 24 前掲書 (23), 49 P
- 25 前掲書 (14), 105 P
- 26 ジュリエット・アルビン著 (山松質文・谷嘉代子訳) 『心身障害児のための音楽療法』, 岩崎学術出版社, 1968, 77 P
- 27 姜信子著 『日韓音楽ノート』, 岩波書店, 1998, 3 P
- 28 赤星建彦著 『ドレミでリハビリ』, ぶどう社, 1984, 97 P
- 29 前掲書 (28), 131 P
- 30 前掲書 (28), 22p
- 31 前掲書 (28), 109 P
- 32 前掲書 (23), 95 P
- 33 前掲書 (28), 52 P
- 34 前掲書 (14), 106 P
- 35 前掲書 (14), 107 P
- 36 E.ラドシー・J.ボイル共著 (徳丸吉彦・藤田芙美子・北川純子共訳) 『音楽行動の心理学』, 音楽の友社, 1985, 163 P
- 37 前掲書 (2), 111 P
- 38 千住真理子著 『生命が音になるとき』, オーム社, 1995, 30 P
- 39 前掲書 (2), 233 P
- 40 伊能美智子著 『音楽ってなあに』, 春秋社, 1987, 37 P
- 41 前掲書 (14), 113 P
- 42 巡 静一編 『障害児と遊び』, ミネルヴァ書房, 1975, 30 P
- 43 前掲書 (23), 149 P

- 44 前掲書 (2), 135p
- 45 前掲書 (28), 109 P
- 46 前掲書 (23), 168 P
- 47 森本尚幸著「音楽を通じてボランティア活動」, 『第三文明2月号』, 第三文明社, 2001, 9P
- 48 前掲書 (14), 112 P
- 49 前掲書 (14), 29 P
- 50 ドキュメントにつぼん『ぼくに力をくれたロックーサルサ・ガムテープと仲間たち』
NHK, 1999.12.21放送

(藤原等：本学教授)

(塩田英樹：本学事務職員＝実習センター所属・健康プランニング学科付＝)